

令和7年度

野口町中世館跡発掘調査 現地説明会

各務原市埋蔵文化財調査センター

野口町中世館跡とは

戦国時代に築かれた1辺75mほどの方形居館で、敷地内の四方を囲い込むように土塁と外堀が築かれています。本遺跡の特色でもある南東部の区画については、内部へクランクするように築かれる土塁・外堀がある一方で、他と同様に四隅の一角をなす土塁・外堀が築かれています。このような複雑な構造に加えて、⑥曲輪状遺構や⑦檜台状遺構が附設されており、一般的な方形居館とは異質な部分があります。

本調査は土地造成に伴う、記録保存を目的とした調査になります。居館内部の遺構については地中に現状保存されるため、土塁とそれに伴う堀（溝）を主な対象としています。

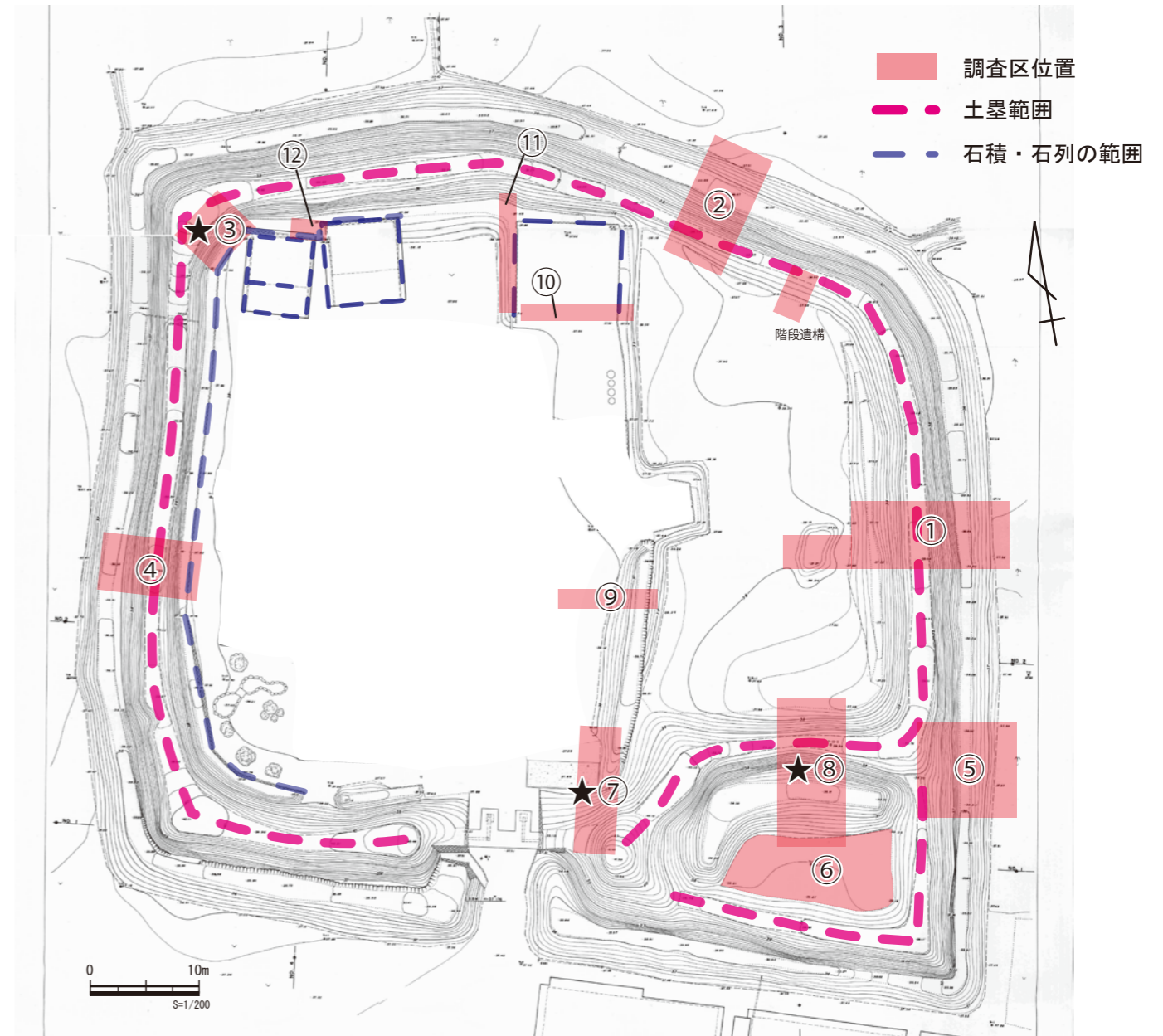
◆中世館跡の土地の歴史

- ・ 古代（8世紀）の生活跡
- ・ 中世（12～13世紀）の生活跡
- ・ 中世（15世紀後半～16世紀前半）
 - ※この時期に初期外堀と初期土塁が構築
- ・ 近世（江戸）
- ・ 近代（明治）

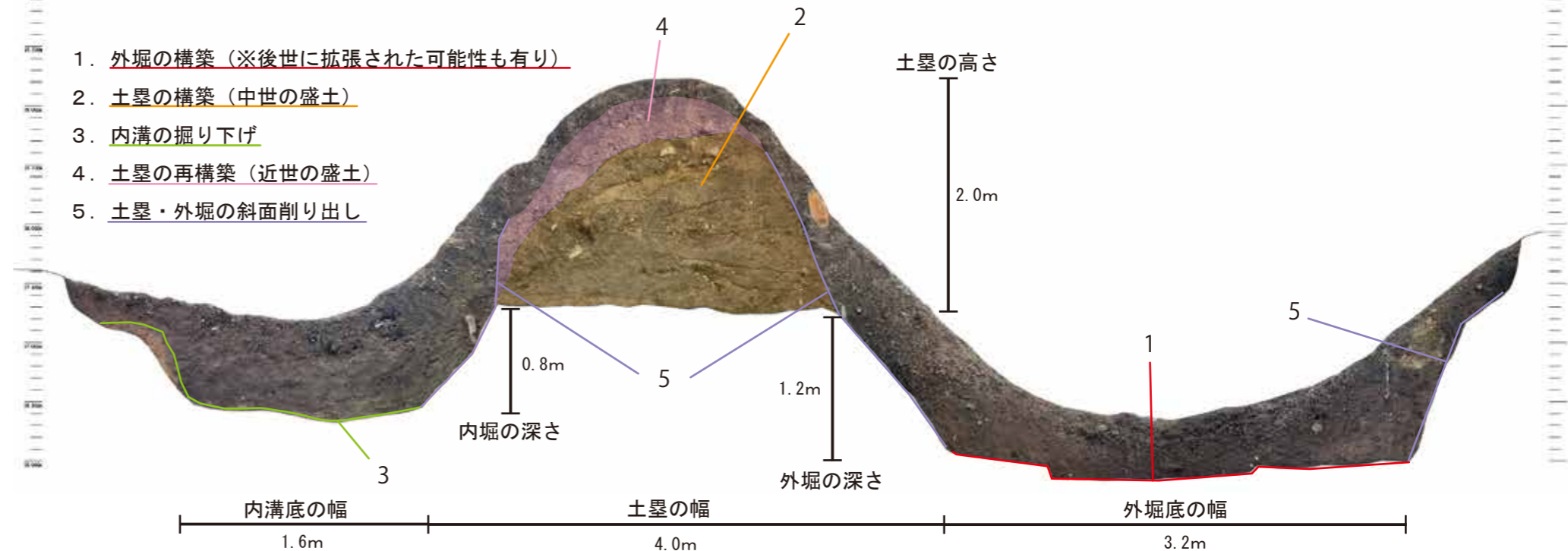
◆改修の内容と推定

- ・ 改修a 内溝の掘削
- ・ 改修b 土塁の盛り足し
- ・ 改修c 土塁両側面を急勾配に成形
- ・ 改修d 南東隅のクランク部を拡張
 - 全体形状を方形に変更「⑥曲輪状遺構」を整地
- ・ 改修e 「⑦檜台状遺構」の盛り足し
- ・ 改修f 北東部の土塁上に簡易な石階段と祠設置
- ・ 改修g 敷地の東1/3を南北の溝で仕切り、居住区から外す。
- ・ 改修h 敷地の北東に寄せて建物（土蔵か）を建設。
 - 内溝斜面に石積みをして基礎の補強

「居館の周囲に築かれた土塁と堀がどのように造られ、現在の姿に至ったのか」「戦国時代以降にどのような土地の改修があったのか」を解説します。



土塁・外堀(内溝)の構築過程





①～④・⑧ 土塁の急勾配な斜面（写真：②）

戦国時代、平地の居館には外敵を防ぐために土塁が築かれるようになります。本遺跡の土塁を見ると、絶壁のような急勾配であり、土を盛り上げた後に斜面を削り出していることが分かります。しかし、土塁の構築において、“斜面を削り出す”という工程はなく、斜面の勾配はもう少しなだらかであることが一般的です。つまり、土塁が築かれた当初の姿は現在とは違うのではないかと考えられます。戦国時代以降に、土塁の斜面を急勾配にする、土をさらに盛り上げるなどの改修が加えられたことが推定できます。



⑤ 土塁の先後関係

土色や堆積状況から、土塁構築の新旧が明瞭に分かります。調査区の右半分は茶褐色の旧盛土が主体的に見られ、その一方で、左半分は黄褐色の新盛土が主体的に見られ、旧盛土を覆うように盛られていました。土塁構築の先後関係から、⑥のエリアの土塁は後から付け足されたと考えられます。



⑥ 曲輪状遺構

南東部に平坦なエリアがあり、城郭で見られる曲輪のような役割があったのではないかと推定しています。⑤の土塁の先後関係から⑥のエリアは後から付け足されたと考えられます。かわらけを中心とする遺物が多数出土しましたが、建物跡と断定できる柱穴の並びは確認されませんでした。クランクする土塁の外側に位置するエリアですが、何らかの意図があって⑥曲輪のような区画が増築されたようです。この空間にどのような機能があったのかについては、ほかの遺跡も踏まえて検討していきます。



⑦ 檜台状遺構

野口館跡の中で最も高く盛土された遺構です。高い位置から遠くまで見渡せる檜台のような機能が合った可能性もあります。頂上に平坦にした、あるいは突き固めたような面はなく、柱穴など建物跡は確認できませんでした。物見檜として使われていたのかは断定できませんが、館正面の入口に位置することを踏まえれば、高い構造物を見せることで権威を示すという意図があったと考えられます。

近世～近代の遺構群

本調査では中世以降の土地改修に伴う遺構が多く確認されており、とくに土塁内側の溝に伴う石積みや地表に露出している石列があります。鬼門を意識した場所とされる北東部では、石組をした階段があり、祠があったことが想像できます。北西に確認できる石列は、近代以降の蔵の礎石と考えられ、周囲にはその屋根瓦が多数散布しています。付近の内溝からは、近代瓦のほか蔵に納められていたと思われる近代磁器などが出土しています。



階段遺構



⑨ 敷地内中央の溝状遺構



③内溝に伴う石積み

主な出土遺物

土塁・外堀から出土する土師器皿、山茶碗は室町時代（13～14世紀）のものが多く、野口館跡存続期とされる15世紀の遺物は少ないです。土塁構築の際に盛土に前段階の遺物が混入しているためと考えられます。中世だけではなく、古代の遺物も多数出土しており、とくに①の内溝からは全国的にも出土事例が少ない羊形硯（羊の頭部が付いた硯）が出土しており、一方で、石積み・石列付近からは近代瓦や近代磁器が多数出土しています。建物の屋根瓦や食器類などが短期間に溝に大量に廃棄されたものと見られます。野口館跡の存続時期について、今後の遺物精査から時期の特定を進めていきます。



土師器皿

野口町中世館跡の歴史

野口町中世館跡は土塁や堀（溝）が、現在まで非常に良好な状態で残されてきた遺跡です。とくに周囲を囲む土塁と堀は、中世武士の居館の姿を想像させます。しかし、本調査を踏まえると、中世（15世紀）に築かれて以降、土塁や堀、南東部の拡張部などさまざまな改修を重ねていることがわかりました。また、近世以降は安積家が代々住まれ、土塁に沿う内溝や石積みなど土地の改修も広く行われています。時代が移り変わるごとに居館の姿も大きく変わっていったものと考えられます。

土塁などの改修があった背景には、戦国時代の歴史ある土地として安積家代々が継いできた由緒を示す、方形居館の姿を維持するといった目的もあったのかもしれませんが、館跡に代々居住されていた安積家が、大切に守ってきたために、現代まで残されました。